ninety-nine resources

語りかたのエクササイズ

玄 宇民 / Woomin Hyun
エルサムニー ソフィー / Sophi Elsamni
佐藤朋子 / Tomoko Sato
吉田高尾 / Takao Yoshida
ジョイス・ラム / Joyce Lam

東京藝術大学大学院映像研究科｜RAM Association

99 RESOURCES

2019.06 — 2020.03

99

Introduction

■ List of 99 RESOURCES

本冊子では、RAM Associationにおける2019年度のプロジェクト《語りかたのエクササイズ》でのリサーチ発表や議論で取り上げた作品・書籍の中から99本をセレクトし、「99 RESOURCES」としてポスト・ドキュメンタリーに関連するリストを作成しました。網羅的でも正史的でもない、偏りをもったリソース集は、新たな実践のための手引きであり、ポスト・ドキュメンタリーの地平を拡げることを企図して公開します。

■ Essays

リストに加えて、《語りかたのエクササイズ》で中心となったメンバーが作品をセレクトし、個別のレファレンスを加えた上で自身の問題意識や主題について振り返るエッセイを収録しています。《語りかたのエクササイズ》での議論を補助線にして、様々なバックグラウンドを持ったメンバーが表現活動の実践を通して得た気づきや思考について触れています。

99 ninety-nine resources

注:
タイトル・人名は日本で展示・上映されたものに関しては公開時の表記を使用。

書籍は原著および邦訳書の情報を併記。

作品をオンラインで公開しているなど有用性の高い情報に関してはURLを記載。

■ Art works

1 **『カメラを持った男』**
ジガ・ヴェルトフ
Dziga Vertov
1929 / 映画 / ソビエト連邦

2 **『マミー・ウォーター』**
ジャン・ルーシュ
Jean Rouch
1956 / 映画 / フランス
http://icarusfilms.com/if-mam

3 **『北京の日曜日』**
クリス・マルケル
Chris Marker
1956 / 映画 / フランス

4 **『ある夏の記録』**
ジャン・ルーシュ、エドガール・モラン
Jean Rouch, Edgar Morin
1961 / 映画 / フランス

5 **『人間ピラミッド』**
ジャン・ルーシュ
Jean Rouch
1961 / 映画 / フランス

6 **『ラ・ジュテ』**
クリス・マルケル
Chris Marker
1962 / 映画 / フランス

7 **『美しき五月』**
クリス・マルケル
ピエール・ロム
Chris Marker, Pierre Lhomme
1963 / 映画 / フランス

8 **『あなたは…』**
萩元晴彦、寺山修司
Haruhiko Hagimoto, Shuji Terayama
1965 / テレビ番組 / 日本
https://www.paravi.jp/title/11902

9 **『略称・連続射殺魔』**
足立正生
Masao Adachi
1969 / 映画 / 日本

10 **『リトアニアへの旅の追憶』**
ジョナス・メカス
Jonas Mekas
1972 / 映画 / アメリカ

11 **『マイルストーンズ』**
ロバート・クレイマー
Robert Kramer
1975 / 映画 / アメリカ

12 **『ハエ』**
フランツ・ロフュシュ
Ferenc Rófusz
1980 / アニメ / ハンガリー

13 **『アリックスの写真』**
ジャン・ユスターシュ
Jean Eustache
1980 / 映画 / フランス

14 **『フィツカラルド』**
ヴェルナー・ヘルツォーク
Werner Herzog
1982 / 映画 / ドイツ

15 **『ルアッサンブラージュ』**
トリン・T・ミンハ
Trinh T. Minh-ha
1982 / 映画 / アメリカ

16 **『サン・ソレイユ』**
クリス・マルケル
Chris Marker
1983 / 映画 / フランス

17 **『東京裁判』**
小林正樹
Masaki Kobayashi
1983 / 映画 / 日本

18 **『ジャンピング』**
手塚治虫
Osamu Tezuka
1983 / アニメ / 日本
https://tezukaosamu.net/jp/anime/72.html

19 **『ルート1／USA』**
ロバート・クレイマー
Robert Kramer
1983 / 映画 / アメリカ
（製作：フランス、イギリス、イタリア）

20 **『真昼の不思議な物体』**
アピチャッポン・ウィーラセタクン
Apichatpong Weerasethakul
2000 / 映画 / タイ、オランダ

21 **『SELF AND OTHERS』**
佐藤 真
Makoto Sato
2000 / 映画 / 日本

22 **『H Story』**
諏訪敦彦
Nobuhiro Suwa
2000 / 映画 / 日本

23 **『外国人よ、出て行け!』**
パウル・ポエット
Paul Poet
2002 / 美術 / オーストリア

24 **『Where We Came From』**
エミリー・ジャーシル
Emily Jacir
2001- 2003 / 美術 / パレスチナ
http://8b.iksv.org/2003/english.asp

25 **『阿賀の記憶』**
佐藤 真
Makoto Sato
2004 / 映画 / 日本

26 **『November』**
ヒト・シュタイエル
Hito Steyerl
2004 / 美術 / ドイツ
https://vimeo.com/88484604

27 **『シルビアのいる街の写真』**
ホセ・ルイス・ゲリン
José Luis Guerín
2007 / 映画 / スペイン

28 **『鳳鳴（フォン・ミン）—中国の記憶』**
ワン・ビン
Wang Bing
2007 / 映画 / 中国
（製作：香港、フランス、中国）

29 **『A Short-Story on Forgetting and Remembering』**
ジュン・ヤン
Jun Yang
2007 / 美術 / 台湾
http://junyang.info/project/a-short-story/

30 **『日本の時』**
ジャン＝シャルル・フィトゥッシ
Jean-Charles Fitoussi
2008 / 映画 / フランス

31 **『ドメスティック・ツーリズム II』**
マハ・マームーン
Maha Maamoun
2009 / 美術 / エジプト
http://sharjahart.org/sharjah-art-foundation/projects/domestic-tourism-ii-the-film

32 **『個室都市 東京』**
Port B
2009 / 演劇 / 日本
http://portb.net/%E5%80%8B%E5%AE%A4%E9%83%BD%E5%B8%82-%E6%9D%B1%E4%BA%AC/

33 **『ゲスト』**
ホセ・ルイス・ゲリン
José Luis Guerín
2010 / 映画 / スペイン

34 **『NIGHTLESS』**
田村友一郎
Yuichiro Tamura
2010 / 美術 / 日本
http://www.damianoyurkiewich.com/cv/index.html

35 **『なみのおと』**
酒井 耕、濱口竜介
Ko Sakai, Ryusuke Hamaguchi
2011 / 映画 / 日本

■ Books

36 『重信房子、メイと足立正生の アナバシス そしてイメージのない 27年間』
エリック・ボードレール
Eric Baudelaire
2011 / 映画 / フランス
http://baudelaire.net/anabases3/the-anabasis--film/

37 『War Tropes』
ハルン・ファロッキ
Harun Farocki
2011 / 美術 / ドイツ
https://www.harunfarocki.de/installations/2010s/2011/war-tropes.html

38 『回莫村（ホェイモ村）』
シュウ・ジャウェイ
Hsu Chia-Wei
2012 / 美術 / 台湾
https://hsuchiawei01.blogspot.com/2014/07/huai-mo-village.html

39 『消えた画 クメール・ルージュの 真実』
リティ・パン
Rithy Panh
2013 / 映画 / カンボジア、フランス

40 『アラビアン・ナイト』
ミゲル・ゴメス
Miguel Gomes
2015 / 映画 /
ポルトガル、フランス、ドイツ、フランス

41 『日曜日の散歩者 忘れられた台湾の詩人たち』
ホアン・ヤーリー
Ya-Li Huang
2015 / 映画 / 台湾
https://sunpoday.com/

42 『ロマン派の音楽』
ミヤギフトシ
Futoshi Miyagi
2015 / 美術 / 日本
http://fmiyagi.com/lang/jp/a-romantic-composition

43 『Teleny』
Jamie Crewe
2015 / 美術 / イギリス
http://www.jamiecrewe.co.uk/teleny.html

44 『パール』
パトリック・オズボーン
Patrick Osborne
2016 / アニメ / アメリカ
https://youtu.be/WqCH4DNQBUA

45 『海の彼方』
黄インイク
Huang Yin-Yu
2016 / 映画 / 台湾、日本
http://www.moolinfilms.com/en/?p=114

46 『Love Story』
キャンディス・ブレイツ
Candice Breitz
2016 / 美術 / ドイツ
https://www.candicebreitz.net/

47 『アセント』
フィオナ・タン
Fiona Tan
2016 / 美術 / オランダ
https://fionatan.nl/project/ascent-2/

48 『気狂い屋敷で：島の家でゾーイー（と他の物語）を読む』
ミヤギフトシ
Futoshi Miyagi
2016 / 美術 / 日本
https://www.museum.toyota.aichi.jp/exhibition/Spider-Thread/?t=2016

49 『利未記異聞 | WRONG REVISON』
荒木 悠
Yu Araki
2016 / 美術 / 日本
https://www.okayamaartsummit.jp/2016/artists

50 『BRIDGIT』
シャーロット・プロジャー
Charlotte Prodger
2016 / 美術 / イギリス
https://www.artscouncilcollection.org.uk/artwork/bridgit

51 『Also Known As Jihadi』
エリック・ボードレール
Eric Baudelaire
2017 / 映画 / フランス
https://dafilms.com/film/10487-also-known-as-jihadi

52 『The Art History Lessons by Professor Kim』
ミナ・チョン
Mina Cheon
2017 / 美術 / アメリカ
https://www.ecfa.com/umma-mass-games

53 『ロシア宇宙主義：三部作 』
アントン・ヴィドクル
Anton Vidokle
2017 / 美術 / アメリカ、ドイツ
https://www.asakusa-o.com/russin-cosmism-trilogy/

54 『旅するリサーチ・ラボラトリー』
mamoru、下道基行、丸山晶崇、芦部玲奈
mamoru, Motoyuki Shitamichi
2014〜 / 美術 / 日本
https://www.travelingresearchlaboratory.com/

55 『可傷的な歴史（ロードムービー）』
田中功起
Koki Tanaka
2018 / 美術 / 日本

56 『家の友のための暦物語』
青柳菜摘
Natsumi Aoyagi
2018 / 美術 / 日本
http://geidai-ram.jp/prog-ram/1246/

57 『消された存在、____立ち上る不在』
ガッサーン・ハルワーニ
Ghassan Halwani
2018 / 映画 / レバノン

58 『交換日記』
百瀬 文 、イム・フンスン
Aya Momose, Im Heung-soon
2015-2019 / 美術 / 日本、韓国
http://imheungsoon.com/exchange-diary/

59 『ナイト・クルージング』
佐々木誠
Makoto Sasaki
2019 / 映画 / 日本
https://nightcruising.net/

60 『Triple-Chaser』
フォレンジック・アーキテクチャー
Forensic Architecture
2019 / 美術 / イギリス
https://forensic-architecture.org/investigation/triple-chaser

61 『Dig Your Dreams』
トモトシ
tomotosi
2019 / 美術 / 日本
http://tomotosi.com/portfolio/dig-your-dreams/

62 『蓬莱島古墳』
小宮麻吏奈
Marina Lisa Komiya
2019 / 美術 / 日本
https://www.marinalisakomiya.com/reborn

63 『The Night of the Past Recalls the Past（Edited 1-2）』
キム・ジュウォン
Juwon Kim
2019 / 美術 / 韓国
http://artsonje.cafe24.com/en/the-island-of-the-colorblind/

64 『物語るには明るい部屋が必要で』
ミヤギフトシ
Futoshi Miyagi
2019 / 美術 / 日本
https://fmiyagi.com/in-a-well-lit-room-dialogue-between-two-characters

65 『偽娘恥辱㊙部屋』
ミン・ウォン
Ming Wong
2019 / 美術 / ドイツ
https://www.asakusa-o.com/fake-daughters-room-of-shame/

66 『デカルトからベイトソンへ —世界の再魔術化』
モリス・バーマン / 柴田元幸（訳）
Moris Berman
1981 / 2019邦訳 / 書籍 / 日本
文藝春秋

67 『ディクテ — 韓国系アメリカ人 女性アーティストによる自伝的 エクリチュール』
テレサ・ハッキョン・チャ / 池内靖子（訳）
Theresa Hak Kyung Cha
1982 / 2003邦訳 / 書籍 / アメリカ
Tanam Press / 青土社

68 『文化の窮状：二十世紀の民族誌、文学、芸術』
ジェイムズ・クリフォード / 太田好信（訳）
James Clifford
1988 / 2003邦訳 / 書籍 / アメリカ
ハーバード大学出版局 / 人文書院

69 『女性・ネイティヴ・他者 — ポストコロニアリズムとフェミニズム』
トリン・T・ミンハ / 竹村和子（訳）
Trinh T. Minh-ha
1989 / 1995邦訳 / 書籍 / アメリカ
Indiana University Press / 岩波書店

70 『偶然性・アイロニー・連帯 —リベラル・ユートピアの可能性』
リチャード・ローティ / 齋藤純一、山岡龍一、大川正彦（訳）
Richard Rorty
1989 / 2000邦訳 / 書籍 / アメリカ
ケンブリッジ大学出版局 / 岩波書店

71 『フレイマー・フレイムド』
トリン・T・ミンハ / 小林富久子、村尾静二、矢口裕子（訳）
Trinh T. Minh-ha
1992 / 2016邦訳 / 書籍 / アメリカ
水声社

72 『物語の哲学 — 柳田國男と歴史の発見』
野家啓一
Keiichi Noe
1996 / 書籍 / 日本
岩波書店

73 『ドキュメンタリー映画の地平 —世界を批判的に受けとめるために 上・下』
佐藤 真
Makoto Sato
2001 / 書籍 / 日本
凱風社

74 『The Freedom of the Migrant Objections to Nationalism』
ヴィレム・フルッサー
Vilem Flusser
2003 / 書籍 / アメリカ
University of Ilinois Press

75 『イメージの運命』
ジャック・ランシエール
/ 堀 潤之（訳）
Jacques Rancière
2003 / 2010邦訳 / 書籍 / フランス
La Fabrique / 平凡社

76 『ラディカル・オーラル・ヒストリー
— オーストラリア先住民アボリジニの
歴史実践』
保苅 実
Minoru Hokari
2004 / 書籍 / 日本
御茶の水書房

77 『過去は死なない：
メディア・記憶・歴史』
テッサ・モーリス-スズキ
/ 田代泰子（訳）
Tessa Morris-Suzuki
2005 / 2014邦訳 / 書籍
/ イギリス、アメリカ / 岩波書店

78 『ドキュメンタリーの不確定性原理
—ドキュメンタリーとは何か』
ヒト・シュタイエル
/ 大森俊克（訳）
Hito Steyerl
2008 / 書籍 / ドイツ
/ Turia+Kant / 邦訳冊子
:ASAKUSA（2018）
https://www.asakusa-o.com/hito-steyerl/

79 『解放された観客』
ジャック・ランシエール
/ 梶田 裕（訳）
Jacques Rancière
2008 / 2013 邦訳 / 書籍 / フランス
La Fabrique /法政大学出版局

80 『The Personal Camera :
Subjective Cinema and
the Essay Film』
Laura Rascaroli
2009 / 書籍 / アメリカ
Wallflower Press.

81 『Casa de Lava —『溶岩の家』
スクラップ・ブック』
ペドロ・コスタ
Pedro Costa
2011 / 2013 / 書籍 / 日本、ポルトガル
シネマトリックス Pierre von Kleist
editions

82 『A Choreographer's Score:
Fase, Rosas danst Rosas,
Elena's Aria, Bartók』
Anne Teresa De Keersmaeker,
Bojana Cvejic
2012 / 書籍 / フランス
Mercatorfonds

83 『The Migrant Image: The Art
and Politics of Documentary
During Global Crisis』
T.J. Demos
2013 / 書籍 / アメリカ
Duke University Press

84 『Documentary』
Julian Stallabrass（Ed.）
2013 / 書籍 / イギリス
Whitechapel Gallery

85 『ロバート・クレイマー 1964
/1975 — ヴェトナム戦争時代の
ニューレフトとラディカルシネマ』
遠山純生（編著）
Sumio Toyama
2013 / 書籍 / 日本
シネマトリックス / ソリレス書店

86 『Les écarts du cinéma
/ The Intervals of Cinema』
ジャック・ランシエール
Jacques Rancière
2011 / 2014英訳 / 書籍 / フランス
La Fabrique

87 『映像人類学
—人類学の新たな実践へ』
村尾静二、箭内 匡、久保正敏（編）
Seiji Murao, Tadashi Yanai, Masatoshi Kubo
(Eds.)
2014 / 書籍 / 日本
せりか書房

88 『Documents of Utopia:
The Politics of
Experimental Documentary』
Paolo Magagnoli
2015 / 書籍 / アメリカ
Wallflower Press.

89 『野生めぐり: 列島神話の源流に
触れる12の旅』
石倉敏明、田附 勝
Toshiaki Ishikura, Masaru Tatsuki
2015 / 書籍 / 日本
淡交社

90 『台湾生まれ 日本語育ち』
温又柔
Yuju Wen
2015 / 書籍 / 日本
白水社

91 『Documenting Cityscapes:
Urban Change in Contemporary
Non-Fiction Film』
Iván Villarmea Álvarez
2015 / 書籍 / アメリカ
Wallflower Press

92 『Documentary Across
Disciplines』
Erika Balsom, Hila Peleg（Eds.）
2016 / 書籍 / イギリス、アメリカ
Haus der Kulturen der Welt and
The MIT Press

93 『The Essay Film:
Dialogue, Politics, Utopia』
Elizabeth Papazian,
Caroline Eades
2016 / 書籍 / アメリカ
Columbia University Press

94 『日常と不在を見つめて
—ドキュメンタリー映画作家
佐藤真の哲学』
佐藤 真
Makoto Sato
2016 / 書籍 / 日本
里山社

95 『Apichatpong Weerasethakul
Sourcebook: The Serenity of
Madness』
アピチャッポン・ウィーラセタクン
Apichatpong Weerasethakul
2016 / 書籍 / アメリカ、タイ
Independent Curators International
MAIIAM Contemporary Art Museum
https://curatorsintl.org/shop/apichatpong

96 『ゲンロン0 観光客の哲学』
東 浩紀
Hiroki Azuma
2017 / 書籍 / 日本
株式会社ゲンロン

97 『The Essay Film After Fact
and Fiction』
Nora M. Alter
2018 / 書籍 / アメリカ
Columbia University Press

98 『はじめての沖縄』
岸 政彦
Masahiko Kishi
2018 / 書籍 / 日本
新曜社

99 『What Is Different?:
Jahresring 64 』
Brigitte Oetker,
Wolfgang Tillmans（Eds.）
2018 / 書籍 / ドイツ
Sternberg Press
https://www.sternberg-press.com/product/
what-is-different-jahresring-64/

玄 宇民

映像作家・アーティスト。1985年東京生まれ。生まれた地を離れた人々のありようと移動の記憶、マイグレーションをテーマに映像作品を制作。主な作品に『NO PLACE LIKE HOMELAND』(2011)、『OHAMANA』(2015)、『未完の旅路への旅』(2017)など。香港の離島、韓国の済州島から始まるプロジェクト『逃島記』を2018年より継続中。ソウル独立映画祭(韓国)、Taiwan International Video Art Exhibition(台湾)、ディアスポラ映画祭(韓国)などで作品上映。東京大学文学部美学芸術学専修卒業。東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修士、同博士後期課程修了。

Theme: リサーチからリアクトするためのリハーサル

1 『ある夏の記録』

1961, 映画
ジャン・ルーシュ、エドガール・モラン

ジャン・ルーシュと社会学者エドガール・モランの共同監督作品。1960年のパリ、街頭でのインタヴューと監督・出演者を交えたディスカッションから真実の映画：シネマ=ヴェリテを目指す試み。フレーム内にスタッフや撮影者が映り込む事で撮影者と被写体の力学=ポリティクスをオープンにするという手法は近年現代美術の文脈でもよく目にするが、ルーシュ&モランのこの作品はそれを60年近く前に先取りしている。同じ時代のフランスを被写体としつつ違うアプローチをとったクリス・マルケル&ピエール・ロムの『美しき5月』(1962)と併せて映像におけるドキュメンタリー的アプローチについて考察する際に重要な作品だと改めて感じる。

2 『BRIDGIT』

2018, 美術
シャーロット・プロジャー

iPhoneで撮影された映像とナレーションのみという極めてシンプルな要素で構成されたシングルチャンネルの映像作品。2018年の英国ターナー賞受賞。プロジャーは複数の人格が入る撮影クルーというやり方ではなく、一人でいられることによるプライバシーや「親密性」を重視する。その背景には同性愛者としてのアイデンティティや身体と技術の関係性への関心があり、そこから導かれた極めて質の高いテキストがシンプルなボイスオーバーながら作品に深みをもたらしている。ターナー賞受賞(同年にはForensic Architectureもノミネート)という評価も含めスマートフォン時代のエッセイ・フィルムとして興味深い作品。

3 『The Night of the Past Recalls the Past (Edited 1-2)』

2019, 美術
キム・ジュウォン

韓国の写真家キム・ジュウォンによる映像作品。自身の撮りためているスナップショットに日付と日記的なエピソードを書いたテキストが音楽を背景に流れていくというスライドショー作品。こちらも極めてシンプルな要素で構成され、作家自身の生活の周りから出てきたイメージと言葉で語られているにもかかわらず90分というボリュームも含めどこか寓話的な語りへと受容が変化してゆく。荒木悠も出品の韓国 Art Sonje Center「The island of the colorblind」にて。

4 『はじめての沖縄』

2018, 書籍
岸 政彦

5 『ラディカル・オーラル・ヒストリー』

2004, 書籍
保苅 実

岸政彦は沖縄、保苅実はオーストラリアの先住民コミュニティと、どちらも「他者」としてある土地に赴きそこから何を語ることができるのか、逡巡と挑戦が語られた本。アーティストの制作におけるリサーチについて極めて示唆に富んでいるのはもちろん、「自らの立ち位置について語る」ことだけでもこれだけの豊かさがあるのかと感じさせてくれる。保苅の言葉を借りれば物語ることは「doing history 歴史する」ことであり、この2冊は制作においても大きな影響を受けた。

6 『Triple-Chaser』

2019, 美術
Forensic Architecture

2019年のホイットニー・ビエンナーレにおいて、副理事であるウォーレン・B・カンダースの所有するサファリランドが世界中に催涙ガスを輸出する企業であることへの抗議として作家による作品取り下げが起きた。Forensic Architectureはこのことへのリアクションとして、サファリランドが製造する「Triple-Chaser」という型の催涙ガスが世界のどの地域において市民の制圧に使われてきたかをTriple-Chaserの3Dイメージを作ることによって解析していく、という「映像調査 Video Investigation」作品を制作、ビエンナーレで展示をした（のちに取り下げ）。
現実の社会情勢への反応、リアクトであるが、内容に比してそのビジュアルは極めてポップである（ナレーションは元トーキング・ヘッズのデヴィッド・バーン）。作品はウェブにて閲覧可能、かつ最新の調査動向は常にアップデートされている。

7 『What Is Different?: Jahresring 64』

2018, 書籍
ヴォルフガング・ティルマンス

ヴォルフガング・ティルマンスが右傾化してゆくドイツ／世界の社会情勢に対して「どうしてこうなったのか」を現職の政治家や脳科学者、政治学者、ジャーナリストなど様々な人々に行ったインタヴューや寄稿論文と、自身の撮影した写真とで編集した書籍。インターネット・SNSでの脊髄反射的な現実への反応ではなく、様々な分野の専門家の知見から現代の情勢に「冷静に」反応していく力強さを感じるプロジェクト。同時代の事象に対するアーティストのリアクションの仕方、プレゼンテーションの一例としても学ぶところが多い。

8 『FREEDOM SWIMMERS』

2017, 書籍
Elva Lai

1960年前後、文化大革命を逃れ香港に渡ってきた人々と2010年代にシリアから地中海を渡りヨーロッパに逃げた人々を「Freedom Swimmers」として並行に語る試み。香港については赤字、シリアについては青字でのテキストが同ページにレイアウトされ、ただただ並行して進んでいくという構成に、香港のアーカイヴ写真や現在の香港、シリアの写真が挿入されていく。強引に過去の香港と現在のシリアを結びつけることなく、並置し、提示するという読者に余地を与える手さばきが極めて繊細であると感じた。ドキュメントブックは2015年から続いたプロジェクトの一環であり、インスタレーションおよび映像作品が制作された。

9 『H STORY』

2001, 映画
諏訪敦彦

「ヒロシマ」という主題についての「語れなさ」や様々な距離感をフィクション映画という装置を用いて表現している。映画撮影の現場における撮影者と被写体の力学や『HIROSHIMA MON AMOUR』（アラン・レネ、1959）という原作の再演などメタ・フィクションの仕掛けが今見ても改めてラディカルである。諏訪敦彦の著書『誰も必要としていないかもしれない、映画の可能性のために ――制作・教育・批評』（2020、フィルムアート社）では学生時代から最新作までの思考の過程をたどることができる。

10 『物語るには明るい部屋が必要で』

2019, 美術
ミヤギフトシ

写真および映像と、映像に対応して流れるモノローグ／ダイアローグ音声によって構成されるインスタレーション作品。写真や映像はこれまでの作品でも被写体となってきた風景が映されているが、語りの世界観は同年出版のミヤギフトシの小説集『ディスタント』とリンクしている（しかし必ずしも一致はしておらず、意図的にずらされていたりもする）。読者の想像に委ねられる小説の世界観と、展示空間において設計された世界観の行き来による一致不一致の感覚が新鮮であり、タイムスパンの長さが作品にもたらすレイヤーをとても力強いと感じた。

—

《語りかたのエクササイズ》は様々な語りの構造、工夫をもった作品を参加者それぞれが持ち寄り、参照することで制作のヒントにすることを目指し立ちあげたプロジェクトである。上記にあげた参照作品はアウトプットとしてはシンプルなものが多いが、時事的な社会事象であれ、個々人の日常であれ、あるいは旅した先であれ、自らが立ち会った現実にどう反応し、どう語るかということに意識的な作品を選んだ。その背景には筆者自身がここ数年取り組んでいる「逃島記」というプロジェクトの舞台である香港の社会情勢が大きく変化した2019年、その現実にどう反応すべきか、ということに私自身逡巡したという経緯がある。これらの他に言葉による現実への応答を寓話の域まで高めたものとしては旧ソ連出身の詩人Ilya Kaminskyの『DEAF REPUBLIC』（2019）はそうした経緯を経て出会った羅針盤のような存在であった。そこからロベルト・ボラーニョやエンリーケ・ビラ＝マタス、フェルナンド・ペソアという文学的想像力の助けを得て『逃島記 Ver.2』（2020）という作品を制作するに至ったのであるが、次のステップとしては「イメージによって現実にリアクトする」ことを改めて追求してゆきたいと考えている。

玄宇民『逃島記』（2019）リサーチより

エルサムニー ソフィー

沖縄生まれ。エジプト及び英国にて、国際関係学と中東地域研究学（政治・メディア）を学んだ。関心は、映画を通じた地域研究から制作と幅広い。2019年は、「声」が持つエネルギーや映像作品における「声」が持つ機能や可能性について考えていた。2018年度RAM研修生。2018年度・2019年度イメージフォーラム映像研究所映像アートコース研究生。

Theme: 声とイメージの狭間へ

1 『北京の日曜日』 1969, 映画
『ラ・ジュテ』 1962, 映画
『サン・ソレイユ』 1983, 映画
他映像作品

クリス・マルケル

クリス・マルケルは、この２年近くで一番崇めた作家かもしれません。2019年度の《語りかたのエクササイズ》も含め、昨年度から至るところで常にレファレンスされている作家であり、どのようなテーマを取っても、彼の作品を参照すれば必ず何か学び得るという感覚があります。個人的には、ボイスオーバーとテキストのリズム（と内容）の在り方について参照することが多く、また、「知性でイメージを紡ぐ」ということについて、彼の作品を通して触れた気がします。マルケルの作品については（様々な言語で執筆された）多くの文献があり、これらのテキスト（マルケルの作品を敬愛する執筆者の眼）を通して、マルケルの作品に触れることで「深まる何か」があったのも事実です。

2 『フレイマー・フレイムド』 1992, 書籍

トリン・T・ミンハ

トリン・T・ミンハの代表３作品（『ルアッサンブラージュ』、『ありのままの場所』、『姓はヴェト、名はナム』）の全スクリプトに加え、映像研究者等によるミンハへのインタヴューや研究者等とミンハの対談を掲載した書籍。『姓はヴェト、名はナム』（1989）の作品鑑賞と併せて、同書籍に掲載されているLaleen JayamaneとAnne Rutherfordとの対談を通じて、ミンハのフィクションに対する考察から学ぶことが多かったです。複数の登場人物へのインタヴューがモチーフとなっている同作品の制作過程で、ミンハが可能性を見出した、作品の「構造」や作り手の「コントロール」を逃れて生まれる何かがあるスペース（non-formulable realm of cinema）についての言及が興味深いです。『ルアッサンブラージュ』（1982）では、（マルケル同様）ミンハのボイスオーバーとテキスト、そしてこれら要素とイメージとの関係性について考察することで、彼女が世界をみる目や、彼女のイメージを考える人間としての理念や、根底にある問題提起について、現代でも引き続き（さらに）参考になる点が多くあります。

3 『略称・連続射殺魔』 1969, 映像作品

足立正生

松田政男や足立正生等の風景論は、エリック・ボードレールの作品を通して知り得たものですが、（フレームの中に広がる）風景にその時代や土地の背後にある権力構造が立ち上がる的な見方は、衝撃的であり、かつ、とても示唆的なものとして受け止めました。足立正生は『略称・連続射殺魔』（1969）の制作を通して風景論を概念化したと、ボードレールの作品の中のインタヴューで言及していましたが、そこに辿り着くまでの過程も大変興味深いです。ボードレールは、この理論を「個人的な作用を排除しており、単にこれらの構造こそが主題であると断言しているため、額面通りには受け取れない」と述べていますが、それでも、「我々がその限界を認識していれば、面白い提案として実践し、考えることは開かれている」と述べています。足立とボードレール、この2人の創作活動や実験は、RAM Associationでの議論や活動を深める上で、またその枠外でも、私にとって非常に大きなものとなりつつあります。

4 『重信房子、メイと足立正生のアナバシス そしてイメージのない27年間』

2011, 映画

『AKA Jihadi』

2017, 映像作品
エリック・ボードレール

『重信房子、メイと足立正生のアナバシス そしてイメージのない27年間』(2011)は、《語りかたのエクササイズ》のインタヴューをテーマとしたセッションで、皆と共に考えたい作品として紹介しました。同作品は、重信メイ(日本赤軍の創設者である重信房子の娘)と足立正生(映画監督、赤軍の元メンバーでPFLPと共闘した革命運動家)の声(インタヴュー)を軸に、ベイルートと東京で撮影された8mmフィルムのイメージの紡ぎが付された作品。①2つの声(インタヴュー)を並べた時、または対比させた時に生まれる新たな文脈や形とかニュアンス、②声(音)が先導、その後にイメージを考える·重ねていくプロセス、③ 声について:言葉の発せられ方、誰の声か(ある意味革命家の声)、日本ではもっと違った(狭い)コンテキストに置かれてしまう可能性のある声、④回顧録のような、自身の物語の自己解釈や内省を促すようなスペース(インタヴューの手法/インタヴューイーとインタヴューアーの関係性)について等、人の声を通した語りという点で、何を考えるにしても常に参照する作品になりつつあります。『AKA Jihadi』(2017)は、パリの郊外で育ち、シリアのヌスラ戦線に入隊する若者の辿った道筋を風景論のアイディアを取り入れ追いかけた作品。『略称・連続射殺魔』のアプローチに寄り添っていった作品ですが、文書の挿入という要素が加わったもので、ボードレールの継続的な風景論の試行が確認できます。

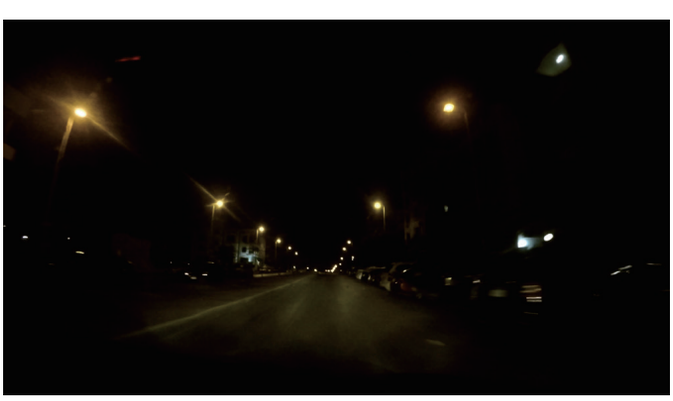
5 『はじめての沖縄』

2018, 書籍
岸 政彦

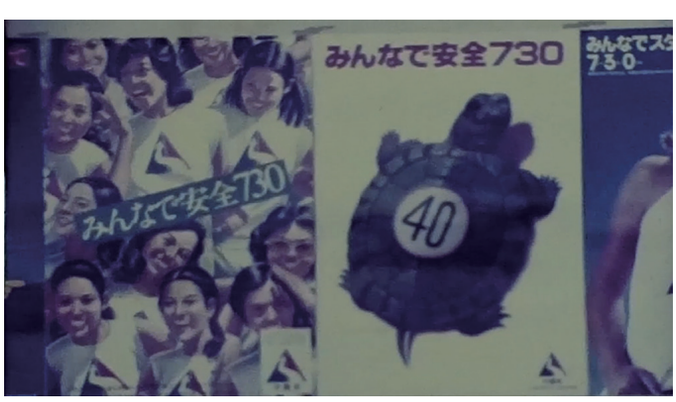
恣意的に引かれた境界線、そして歴史と政治的に構築された構造を認識した上で、自分の立場性を問うこと。結局は、何かを考察したり、その何かについて論じたりする時、考察に深みと誠意を持たせるためには、立場を明確にすることが自身にとって一番重要となってくるということを学んだ気がしました。本書の輪読会で議論にあがった「沖縄に対して欲望する植民地主義的」目線をエドワード・サイードのオリエンタリズムから考察することへの提案に一番興味をそそられました。サイードが説いたオリエンタリズムを、沖縄と日本本土の関係を考える時に用いることができるのか。岸さんの沖縄を語る話法への提案(典型的な話法からはみ出すような沖縄の人々の多様な経験や基地を受け入れさせるような複雑な意思をそのままの形で書き出すこと)に対し、私は、沖縄の人間としてのアイデンティティーを持たない沖縄に生きた(現役・退役)米軍基地関係者やその家族をも含む沖縄に関わる多くの人間の考え方や声に耳を傾けること・姿勢を付け加えます。このセッションでの議論や自分の中で明確化した立場は、2019年度に制作した『父の声』にも反映されていると思います。岸さんの同著に並び、『断片的なものの社会学』(2015、朝日出版社)からも多くを学びました。「断片的」なものやことは、自身の作品制作の中で、父の沖縄についての語りに散りばめられたエピソードを考える際にとても意識したポイントでもあります。

—

この2年にわたり映像について考える中で、私自身の意識が向かった先の一つとして「声による語り(ボイスオーバー)」があります。人の声がもつエネルギーや、その声が示唆するもの、発音される言葉の意味や、その声が語る内容を含め、映像作品における「声」が持つ機能や可能性について考え始めています。同時にその「声」とイメージの関係性(近付いていったり離れていったりする様など)やそれらの「狭間(spaces between voice and images)」について、さらに思考/試行を重ねていきたいと考えています。クリス・マルケルの数々の映像作品やエリック・ボードレールの試みや言葉等は、これらの関心事項をどんどん膨らませてくれます。自身の試みに関しては、「沖縄返還」にまつわる象徴的な出来事をエジプト出身の父の声を通して考える際に、詩人であるIman Mersalのテキスト『The Displaced Voice』(2011)を参考にしました。彼女のテキストを通して父の声を考える上で、その声をある場所に「位置付け」ようとしている自分に批判的になる一方、アクセント(訛り)と権力構造についての興味深い考察等、彼女のテキストには自分がこのテーマに向き合いたいとする衝動を後押ししてくれるものを感じました。扱っている問いやテーマ、作家としてのアプローチに関しては、ボードレールと同様、Naeem Mohaiemenに大きな関心を寄せています。『Two Meetings and a Funeral』(2017)は、アーカイヴ映像やインタヴューで構成される3チャンネルの映像作品で、70年代に盛り上がったThird World Internationalism/ Non-Aligned Movement等と称されるトランスナショナルな非同盟運動が孕んだ複雑さや矛盾についての考察は、大胆かつ緻密な印象を受けました。また、『United Red Army』(2011)は、歴史的出来事の影で起きたことに一瞬の強い光を当てるような試みと、声が先導する作品スタイルとの観点からとても印象に残っている作品です。この2人の作家が扱っている問い、向き合い方や探求方法に多くのヒントを見出しています。



エルサムニー ソフィー『父の声』(2020)より



エルサムニー ソフィー『父の声』(2020)より　映像素材提供:沖縄アーカイブ研究所

佐藤朋子

アーティスト。1990年長野県生まれ、神奈川県在住。2018年、東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。レクチャーパフォーマンスを主として「語り」による表現活動を行う。主な作品に、『The Reversed Song, A Lecture on "Shiro-Kitsune (The White Fox)"』(2018–)、『瓦礫と塔』(2018–)、『103系統のケンタウロス』(2018–)、『ふたりの円谷』(2019–)、『Museum』(2019–)。
WEB｜tomokosato.org

Theme: 連なりと戯れるモノローグ

1 『鳳鳴（フォン・ミン）−中国の記憶』

2007, 映画
ワン・ビン（王兵）

3時間にわたる本ドキュメンタリーは、終始ソファーに座った鳳鳴という女性の語りによって進行する。当時の記録映像などは一切挿入されず、1950年代から彼女と彼女の夫が受けた迫害や送られた強制収容所の話が、淡々と鳳鳴の口から語られ、私達は当時のことを想像する。モノローグが持っている強さや、語りがどうイメージを引き出すのか、ということを考えた。

2 『諜報局の廃墟』

2015, 映像作品
シュウ・ジャウェイ（許家維）

タイのホェイモ村に残る諜報局の廃墟で、タイの伝統的な人形劇が行われている映像と、旧中国国民党の兵士であり、諜報局員だった男によるナレーションを録音している現場の映像が流れる。男の語る内容は、猿が軍を救うという伝説から、彼自身の経験へと移っていく。伝説の物語によって迂回して語られる男の経験と、廃墟と人形劇の光景が入り交じる映像体験であった。

3 『東京裁判』

1983, 映画
小林正樹

1948年に行われた極東軍事裁判・通称「東京裁判」の記録など、既存のフッテージを編集し、まとめあげたドキュメンタリー。佐藤慶のナレーションと武満徹の音楽に、裁判の記録映像をはじめとした戦前の映像や、諸外国の映像が重なる。裁判の様子はもちろんのこと、その前後を考えるための一本。記録から考えるための語りをつくり出す試み。

4 『ロシア宇宙主義：三部作』

2017, 映像作品
アントン・ヴィドクル

宇宙主義の思想家ニコライ・ヒュードロフのテキストをもとに、世界各地で撮影された3部作。宇宙主義は評論やアート、科学的理念や哲学など様々な形で存在しているが、サイエンス・フィクションを思わせる本映像作品を通して、新たな物語のかたちをもって、その断片を知ることができる。

5 『ある夏の記憶』

1961, 映画
ジャン・ルーシュ、エドガール・モラン

ふたりの監督とその友人がパリで街頭インタヴューをしたり、会話をしている様子を撮影して、さらには出来上がった映像を皆で見たりする。登場人物のマルセリーヌはインタヴュアーとして登場したが、後に腕にあったタトゥーから、強制収容所にいたことを友人に話し出す。その後、ひとりで町の中を歩きながら、収容所で亡くなった父を始めとした家族のことや、自分の過去を独り言のように話し出す。街を歩きながら話すマルセリーヌの語りには、時おり鼻歌が混じる。その鼻歌は映像に映るパリの街とは違うところに私を連れて行くようだった。映画の中で、インタヴューや複数人の会話を通して共有している時代やコミュニティーが浮き彫りにされていくなか、ぐっと個人の過去に潜っていった瞬間だった。

—

モノローグとは、ひとりが話す、という語りの形式である。話者と語りの内容はそれぞれの背景、物語や歴史を引き連れて、互いに反応し合う。私はレクチャーパフォーマンスという形式で表現活動を行っており、一人で話すことが多い。語りにおいて起きている現象は多様であり、モノローグにおける話者は、案内人として複数の声、土地、現象を引き連れている。上記のリストは《語りかたのエクササイズ》プロジェクト内で紹介された多々ある作品の中から、印象的なモノローグが登場する作品を選んだものである。

一時期、説経節の『信太妻(しのだづま)』、別名『葛の葉』という物語を追っていた。狐と人間の物語で、元々は仏教の説法を説くためにつくられたといわれているが、親しみやすい物語だったせいか、様々な人々によって語り継がれてきた。語り継がれる過程で、物語は変化し、今でも多様なバリエーションが各地に残っている。

瞽女(ごぜ)と呼ばれる旅をしながら歌を唄う盲目の女性芸人たちにも、この物語は多く語られた。現役で活動している瞽女さんは今は少ないが、記録に残った伊平たけさんの音声を聞くことや、小林ハルさんが唄う映像を観ることができた。故郷や家族と離れ、『信太妻』の物語を唄う声を通じ、直接映像に映っている彼女らの姿や、音声で語られている言葉の内容はもちろんのこと、『信太妻』に登場する夫や息子を置いて森に帰っていく狐や、その物語を背負い、語り継いできた者の声に触れた。それは、歴史の中にいた個人や、ミクロな何かの裏側を、鑑賞者の私が勝手に垣間見てしまったかのようで、複雑な感情が湧き上がる、そんな瞬間だった。瞽女さんの歌のように、私に「語り」の側面を新しく発見させてくれたものからいくつかをここで紹介したいと思う。

『平成山椒太夫—あんじゅ、あんじゅ、さまよい安寿』(姜信子、屋敷妙子、2016、せりか書房)は、安寿と厨子王の物語を追って日本列島各地を廻る旅を記した、物語と紀行文とが折り混ざる一冊である。『山椒太夫』は、森鴎外の短篇小説で一躍有名になった物語であるが、物語自体の歴史は古く、『信太妻』と同様に説経節としても中世や近世にも語られてきた。本書の著者である姜信子は旅をすることで、近代の論理によって失われた物語の姿を発見していく。物語が担う歴史や個人史などの複数かつ複雑な要素を背負ったものに、現代に生きる自分自身がどう近づくことができるのか、多くの示唆をもらった。

『魔法としての言葉　アメリカ・インディアンの口承詩』(金関寿夫、1993、思潮社)は、アメリカ文学者の筆者がアメリカ・インディアンの詩を文学的に解説していく一冊である。日本語に翻訳する難しさや、詩の持つ音楽性の記述不可能性に向き合いながら、詩を紹介していく。「実用」のツールであったアメリカ・インディアンの詩を、彼らの文化も歴史も理解していない私にまで届けてくれる語りの力を教えてくれた。

『Hotel Palenque』(ロバート・スミッソン、1969/1972)は、作家がメキシコに旅した際に撮った写真をもとに、ユタ大学で行ったレクチャーがベースとなった作品である。半ば廃墟となりかけていたホテルの写真を見せながら、スミッソンがレクチャーしていく。一人の作家が徹底的に一つの建物と向かい合い、語りを紡いでいき、それを形にしていく。イメージと語りが、離れたりくっついたりする面白さを教えてくれた。

『クラップの最後のテープ』(サミュエル・ベケット、1958)は、主人公の老人が毎年の誕生日に吹き込んでいた一年の回顧録を聞いていくという戯曲である。過去の自分が更に過去の自分が吹き込んだテープを聞いた感想を話しているテープも登場し、それぞれの時間にいるかつての老人の姿が浮かび上がる。モノローグにおけるディスクジョッキーとしての話者のあり方や、複数の声が同居するということを考えさせられた。

佐藤朋子
『The Reversed Song, A Lecture on "Shiro-Kitsune (The White Fox) "』(2018)より
撮影：澤本望

吉田高尾

横浜国立大学で映画について学んだ後、映画批評などの活動をしながら、シナリオライターとして、かわさきFMで１年間「ラジオドラマの失敗」という番組内のラジオドラマを執筆していた。短編映画の製作、短編演劇の上演を行っている。こういったプロフィールに書ける実績とか受賞は全くなく、自分が何をしている人間か紹介するのに毎回苦労している。最近は「貯金を食い潰してるだけです」で通しており、当分その予定である。

Theme: 机上の憂鬱

1 『人間ピラミッド』

1961, 映画
ジャン・ルーシュ

1959年、フランス統治下のコートジボワールの高校に新入生ナディーヌがやってくることから始まる映画。
監督のジャン・ルーシュによって集められた生徒たちは黒人と白人の間の新たな関係を通して生まれる友情関係、愛情関係についての「フィクション」に自分自身の役を演じながら参加する。
高校生という不安定な思春期の状態の人に、高校生を演じさせるというのは一種の暴力になるのではないかと思いつつ見てしまった。少なくとも高校生の頃の自分は、だれかを好きになる役や、失恋する役、人種差別をする役を演じるということは、とてもできないと思った。しかし、高校生の頃、僕は失恋しかしなかったし、自分の小ささに耐え切れず周りをさらに小さく貶めていたので、役ではなく、事実としてそういう人間だった気がする。
翌1960年、コートジボワールはフランスから独立する。

2 『リトアニアへの旅の追憶』

1972, 映画
ジョナス・メカス

日記的な実験映画を残したジョナス･メカスの作品。第一部は、1950～53年、アメリカ・ブルックリンにやってきたばかりで、何もかもが新鮮に描かれる日々。第二部は、1971年に、故郷のリトアニアに亡命者として帰国した日々。第三部は、ドイツ・ハンブルクの郊外、エルンストホルンへの訪問から始まる。
家族を被写体にした時に、兄弟、姉妹、両親はもちろんそれぞれ別の人なのだけど、そのカメラのまなざしを通して、自分の家族を見てしまうことがある。それはカメラ側のまなざしでもあるのだけど、ふとした瞬間に家族の誰かが、当のカメラ小僧にまなざしを向ける時がある。その親愛に満ちたカメラ目線は、そのカメラマンと被写体にしか本来起きえない奇跡というか、祝福を感じる。家族に会いたくなった。

3 「個室都市 東京」

2009, 演劇
Port B

「フェスティバル／トーキョー 09秋」で2009年に初演された作品。池袋西口公園に出現した24時間営業の個室ビデオ店の中で、さまざまな人々のインタヴューを聞く。僕は、2019年の「TOKYO 2021 美術展 un ／ real engine —— 慰霊のエンジニアリング」展（TODA BUILDING 1F ）にて再演された際に鑑賞。この作品では、矢継ぎ早に「今一番欲しいものは何ですか?」といった質問が、普通の街中の人々と思われる老若男女に行われる。この手法は、1960年代に寺山修司が構成を担当し、テレビマンユニオンの前身となるチームによって制作された『あなたは……』というテレビ番組を参考にしている。次々と脈略もなく聞かれる質問に、人々はあまり考え過ぎずに、カッコつけずに、どう思われるだろうかといった忖度もせずに、その時に思ったことを率直に話している。テレビが持っていたライブ性。何が起こるか分からない、予測がつかないスピード感がおもしろかった。普通の人へのインタヴューであっても、その場で思いついたことをカメラの前で、そのまま発話するという状況だけで、これほどスリリングな映像になるということに驚いた。設計、企画の段階で、予定調和を避ける方法を見つけることが大事だと思いつつ、自分の制作の中でその難しさをどのように乗り越えればいいのだろうかと、頭を抱えてしまった。近過去でしかないはずの既に撮られている映像を、まさに目の前で起こっているかのように、今として見せるにはどうしたら

いいのか。演劇において、目の前で演技する俳優ですら、予定調和の毎回同じことを繰り返しているだけにしか感じられず、そのあまりのつまらなさに苦しんでいるというのに……。

4 『NIGHTLESS』

2010, 美術
田村友一郎

全編がGoogleストリートビューのイメージだけで構成されたロードムービー。
コンセプトが秀逸だった。そして、内容におけるユーモアさとのバランス感を学びたいと思った。そのセンスは学べることではなく、神様に愛されているかどうかという気もしてくるのだけど、10年前のGoogleストリートビューは、今なら何になるだろうと思う。技術革新による形式の発展と、それに伴う内容のユーモアに思いを馳せつつ、Amazon dashボタンを僕はいじっている。

5 『外国人よ、出て行け!』

2002, 映画
ポール・ポエット

オーストリアで外国人排斥を掲げる極右政権が成立した2000年に、オーストリアの演劇祭で、ドイツの演出家、美術作家、映画監督のクリストフ・シュリンゲンジーフが行ったパフォーマンスのドキュメンタリー作品。歌劇場広場に設置したコンテナに移民候補を収容し、24時間ネット中継と、ネット投票によって強制送還する移民を決める『Bitte, liebt Österreich! (お願い、オーストリアを愛して!)』を行った。
シュリンゲンジーフに対して、絶叫して罵倒するおばあちゃんが「アーティストめ!」と言っていたり、苦言を呈する市民の名前を聞いたらポーランド系だったりと、笑いを禁じ得ない。しかし、このパフォーマンスは、数十キロ先の入国管理所では平然と行われていることを、露悪的に行っているに過ぎない。その20年前のパフォーマンスを、数年前に翻訳された『人工地獄』(クレア・ビショップ、邦訳:2016、フィルムアート社)で読んで知っている人も多いかもしれない(辛口のビショップですら褒めていた)。
作品を見ながら興奮したし、面白かったのだが、もう同じことは誰にもできないなとも思った。『人工地獄』によって、アート系の人々に膾炙した「委任されたパフォーマンス」という搾取構造を利用することも、回避することもできない中で、おもしろいことをやる。
そこには人種、民族の問題もある。もし、シュリンゲンジーフが黒人や、アジア人だったら、ヨーロッパのアート界は彼を受け入れただろうか。
これは卑劣な問題提起かもしれない。それは他でもないシュリンゲンジーフだから、成立しているのだという「天才」の概念で説明する人もいるだろう。彼が49歳で夭折してしまったことも関係しているという邪推すら頭をかすめる。ドイツ人がオーストリアで行ったことを(極々個人的な印象だが、日本と韓国の関係に近いと感じる。こちらでは本籍等、併合時にすら差別している点、あちらでは、ヒトラーがオーストリア人である点等、差異も、もちろんあるが。ね。地雷原でしょ。)ヨーロッパ全体から見た時に、地理的におもしろがっている節も見える。参考にはできるが、真似はできないマスターピースだと思う。

—

akakilikeの舞台作品**『眠るのがもったいないくらいに楽しいことをたくさん持って、夏の海がキラキラ輝くように、緑の庭に光あふれるように、永遠に続く気が狂いそうな晴天のように』**(2019)が今まで観てきた舞台作品の中で、一番素晴らしかった。「当事者」という言葉を吹き飛ばす「なにか」だった。韓国に知り合い数人とアート巡りの旅行に行った際に、韓国・国立現代美術館果川館に寄り、常設展の展示物の余白に南北統一についての「なにか」を感じた。「当事者」、「共同体」といったことを考えながら、RAM内の映像資料を編集して、**『コトわり』**という映像作品を制作した。まだまだ自分の考えていることが、言葉ばかりの机上の空論で、実践は伴っていないというのが現状だ。それでも、実践できないような空論を排泄しつつ、それを無理にでも実践しようとすることの狭間で、憂鬱になる時間を増やしていきたいと思っている。

吉田高尾『コトわり』(2020) 奄美群島 喜界島にて

吉田高尾『コトわり』(2020) 青森 種差海岸にて

ジョイス・ラム

香港生まれ。ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）日本語・経済学科卒業。慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修了。アートブックをはじめ、出版物からコンサルティングまで広義での編集に携わる。担当した片山真理『GIFT』（ユナイテッドヴァガボンズ）が第45回木村伊兵衛写真賞を受賞。個人では東アジア圏の島嶼のリサーチに基づいた、ドキュメンタリー的な映像の制作に取り組んでいる。2020年より東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻在籍。

Theme: 場所を知るために

1 『アセント』

2016, 美術
フィオナ・タン

2 『Domestic Tourism II』

2009, 美術
マハ・マームーン

フィオナ・タンの『アセント』（2016）はネット上で一般公募で呼びかけ、富士山を被写体とした約4,000枚の写真をタンが編集し、モンタージュした「フォト・フィルム」。一方、『Domestic Tourism II』（2009）はピラミッドが登場するアラブ映画の名シーンをマハ・マームーンが編み直した60分の映像作品。観光地として消費され続けている強い記号性が持つそれぞれのモニュメントは、時代を超越したものとして現代社会の文脈でどう映り出しているのかを考えさせられる。歴史上の出来事と集団／個人の記憶の関係性を繋げていく。

3 『野生めぐり：列島神話の源流に触れる12の旅』

2015, 書籍
石倉敏明、田附 勝

人類学者の石倉敏明と写真家の田附勝が日本各地の聖地で継がれている信仰、神事、伝統習慣、お祭りなど、民俗の源流を探しに行く旅の記録。二人の対話、石倉の論考、そして田附の写真で構成され、「八百万の神」という言葉が思い起こされながらその多様性を実際に見せつけられる。例えば、捕鯨の協働体制はオーケストラを思わせるものであったり、東北では人間と生きものとの隔たりがないということなど、訪れたことのある場所についても全く別の視点から認識できるようになる。フィールドワークにたくさんのヒントを与えてくれる一冊。

4 『重信房子、メイと足立正生のアナバシス そしてイメージのない27年間』

2011, 映画
エリック・ボードレール

60年代後半から過激な革命運動を行った日本赤軍の創設者である、重信房子とその関係者たちの30年間の軌跡を描いたドキュメンタリー映画。登場人物の一人として映画監督の足立正生による風景論（＝風景はその時代の権力を象徴する構造を持っている）を参考にした撮影手法で、ベイルートと東京の風景を中心に構成され、娘の重信メイと足立正生のナレーションが証言として繋がっていく。本人が直接登場しないのにも関わらず、その衝撃的な経験が生々しく脳内に浮かび上がる。

5 『ラ・ジュテ』

1962, 映画
クリス・マルケル

時間と記憶をテーマに、ほぼ全編モノクロ写真で構成された28分のショートフィルム。過去と未来を行き来する主人公と対照的に、そして最終に運命的なループに落ちてしまうことを表現するために、写真というメディアを使うことで「時間が止まっている」ことが強調される。静止画に様々なエフェクトを活用し、一枚の写真が表示される長さでリズムをコントロールすることで時間が生まれ、映画になる。計算され尽くしたクリス・マルケルの名作。

6 「旅するリサーチ・ラボラトリー」

2014〜, 美術
mamoru、下道基行 ほか

近年、リサーチをもとに作品を制作するアーティストが増えて、フィールドワークという言葉も本来の学術的な枠を越えて定着しつつある。このプロジェクトは、作家や研究者だけではなく、編集者、郷土菓子の研究者、映像人類学者など、ジャンルを問わず独自のフィールドワーク的手法とアウトプットを実践する方々を訪ね、インタヴューを行い、複数のメンバーのいるラボ／コレクティヴとして、フィールドワークと表現の可能性を検証する。筆者は2014年にリサーチ・アソシエイトとして参加したが、インタヴューとインタヴューの間の時間、移動中の会話で思わず重要な話題になることが多く、旅の後半は車を編集室に見立てて録音したり、最終アウトプットを考えたりした。現在もmamoru、下道基行が中心となり活動は継続中。

—

以上のレファレンス作品、そして今まで筆者が制作してきた映像作品を並べて改めて考えてみると、私は「場所」とそこで生活する人間の営み、その場所で行われている特有の習慣や風習に惹き付けられることが多いことに気づいた。

一つの「場所」を取り上げて作品を制作を行うときに、現場に足を運んで観察するための「フィールドワーク」は不可欠なことだ。伝統的な慣習を記録したドキュメンタリー映像として、Yanara Guayasamin監督による**『La Mesa』**（2007）はエクアドルで毎年11月に行われ、死者を迎えるための儀式として女性たちが用意する「食卓」を固定カメラで淡々と記録している。ワンシーン・ワンカットの構成でたった7分弱のショートフィルムでは最後にその儀式が行われている場所の本来の姿が暴露され、映像だからこそ導かれる結末には驚きを隠せない。一方で、「RAM PRACTICE 2020 - Online Screening」の一環で上映した**『食火』**（2020）という筆者の映像作品は、瀬戸内海の大三島で行われている「とんど焼き」という行事を取り上げているが、単に記録するだけではなく、村の人々が「とんど」の残り火で食べる行為に注目して編集の方向性を定めた。撮影時に目撃した驚きの風景と、フランスの社会人類学者のクロード・レヴィ=ストロースが**『生のものと火を通したもの』**（邦訳：2006、みすず書房）で提唱されている、人間は料理をすることで文化を生み出しているという概念が重なったことがきっかけとなった。

実際、映像人類学は映像を用いて学術研究のために制作されたものと、アート作品としての作品が大きく分けられている傾向があるように感じている。その二つを融合させたドキュメンタリー映像をプロデュースしているハーバード大学の感覚民族誌学ラボ（Sensory Ethnography Lab）で制作された実験的なドキュメンタリー映画は筆者に大きな影響を与えてくれている。**『マナカマナ雲上の巡礼』**（2013）はその一つだ。ヒマラヤを望むネパールの山脈に、ヒンドゥー教の女神マナカマナを祀る寺院が佇んでいるが、かつて3時間かけて登った道のりは今や片道10分のロープウェイが運んでくれている。無限にループしているロープウェイの中を通過する様々な巡礼者の人間模様が映し出され、ワンシーン・ワンカットの編集は人生における循環的な流れが強調されている。

また、歴史的事件から現在まで続いている社会問題を明らかにする作品も紹介したい。一つ目は、パトリシオ・グスマン監督の**『真珠のボタン』**（2015）。西パタゴニアの海底で発見された一つのボタンから物語が始まり、ピノチェト政権により政治犯として殺された人々や、自由を奪われたパタゴニアの先住民の声を繋いでいく。文明が始まる前、遥か古代に流れ続けている水に埋葬された声が掘り出され、チリの大自然に圧倒される叙情詩的映画である。同じように歴史の惨劇を取り上げているドキュメンタリー映画にジョシュア・オッペンハイマー監督の**『アクト・オブ・キリング』**（2012）がある。1965年の「インドネシア共産主義狩り」という大虐殺を実行した「犯人」に取材し、当時行われた拷問などのシーンを再演するように撮影は仕込まれている。登場する「犯人=役者」は次第に感情移入し、当時の記憶が呼び起こされていく。カメラに映っているのは果たして演技なのか本気なのか、ドキュメンタリー映画の定義が揺らぐような衝撃的な作品だ。

暮らしの営み、習慣、文化、歴史、地勢、気候、生態——「場所」を成り立たせる要素は無数にある。その複雑性を伝えるために、映像は目の前に起きている現象を多面的に捉えて、表現できるメディアだと考えているが、今後は映像人類学における芸術表現を探求しながら、その可能性を拡張させていきたいと思う。

ジョイス・ラム『食火』（2020）より

■ RAM Series Project
《語りかたのエクササイズ》

《語りかたのエクササイズ》は映像作家・アーティストの玄宇民によってRAM Associationで開催されたプロジェクトです。アイデンティティや社会問題、土地性といった主題に限らず、語りかたや語りのリズムと戯れることからも新たな映像ドキュメンタリーの可能性が生まれるはずであるという仮定のもと、様々な参照作品を参加者が持ち寄り「新しい語りかた」について議論する場を設けました。ある結論に到達することよりも、できるだけ多様な実例に触れ制作やリサーチにおける問題意識を深めることを目指し、2019年度は全12回にわたり以下のプログラムを実施しました。

A. 語りかた研究

「ロードムービー」「モノローグ」「インタヴュー」など一つの語りの枠組みを取り上げて、それにまつわる作品の実例を持ち寄り、その手法と効果を検討。

B. リサーチ・イン・プログレス

アーティストやキュレーターを招き、作品以上に豊かなものを含んでいる制作のプロセスを共有し、議論する会を開催。

C. 輪読会

ポストドキュメンタリーにまつわる文献の輪読会。

D. 実作ワークショップ

上記の議論から発展して、「スライドショー」および「モノローグ」をテーマにゲストを招いての実作・講評ワークショップを開催。

■ RAM Association
メディアプロジェクトを構想する
映像ドキュメンタリスト育成事業

RAM Associationは、映像ドキュメンタリストの名のもとに、実践的な活動を行うことのできる人材の育成を図っていきます。参加する研修生は、自らの研究や制作をもとにリサーチ、フィールドサーヴェイ、インタヴューといった同時代の諸問題を取り扱う方法論を探究し、都市やアジア太平洋地域を訪ねて活動を展開していきます。2019年度は様々な芸術実践のプロジェクトを立ち上げて、共に取り組むコレクティヴな活動によって、知見と経験を高めるプログラムを実施しています。

主 催｜東京藝術大学大学院映像研究科
助 成｜2019年度文化庁「大学における文化芸術推進事業」
WEB｜http://geidai-ram.jp/

語りかたのエクササイズ　99 RESOURCES

発行日	2020年3月
発行	RAM Association（東京藝術大学大学院映像研究科）
Director	玄 宇民（RAMフェロー）
Authors	玄 宇民（RAMフェロー） エルサムニー ソフィー（RAMインターン） 佐藤朋子（スタッフ） 吉田高尾（研修生） ジョイス・ラム（研修生）
Supervisor	和田信太郎（RAMディレクター）
Designers	宇佐美奈緒、村田萌菜（スタッフ）

Printed in Japan @2020 RAM Association　無断転写、転載、複製は禁じます。